

『タイムズ』 1785年～1985年の 学術引用調査

マイク・セルウォール
(シェフィールド大学教授)

原文 : Thelwall, Mike, "Past Echoes and Present News: Academic Citations to *The Times* 1785-1985" (Gale, 2024)



著者について

Mike Thelwall (Professor of Data Science, University of Sheffield)

英国シェフィールド大学情報学部データサイエンス教授。ランカスター大学で理学士号と博士号を取得、1989年から2023年までウォルバーハンプトン大学で数学と統計学を教えるかたわら教育テクノロジーを研究、その後ウェブメトリクス研究に転向しました。統計サイバーメトリクス・研究評価グループ (Statistical Cybermetrics and Research Evaluation Group) を設立・主導し、書誌計量学や感情分析について博士課程の学生22人を指導、2015年に科学計量学でデレク・デ・ソラ・プライス賞を受賞、数多くの国際研究プロジェクトに協力し、国際連合や英国研究イノベーション機構など、さまざまな組織に貢献してきました。

目次

1.	はじめに.....	3
2.	1985年以前の『タイムズ』を引用している主な主題分野.....	4
3.	主題分野別の歴史的傾向.....	5
3.1	新しい『タイムズ』記事を引用する傾向が強い分野.....	6
3.2	古い『タイムズ』記事を引用する傾向が強い分野.....	7
4.	『タイムズ』記事を引用する理由.....	8
4.1	新聞の視点、証拠としての利用.....	8
4.2	法的、社会的変化.....	9
4.3	医学的または健康に関する発見や脅威.....	10
4.4	新聞や一般大衆の姿勢.....	10
4.5	政府または体制の姿勢や方針.....	11
4.6	芸術に関する見解.....	11
4.7	世界情勢の証拠.....	12
4.8	その他.....	14
5.	引用頻度の高い学術誌.....	15
6.	引用先文献によく見られるテーマ.....	16
7.	引用頻度の高い機関.....	16
8.	引用先文献の種類と年.....	17
9.	まとめ.....	19
10.	参考資料.....	19
11.	付録:トピックモデリングのトピックキーワード.....	20

1. はじめに

本稿では、創刊から1985年までの『タイムズ』（*The Times*）記事を引用した2002年以降の学術研究文献を調査する。これは、Gale社が『タイムズ』デジタル版の頒布権を独占的に保有している期間に当たる。新聞のデジタル化は、研究者や学生による利用の（パソコンを通じた）簡便化、（検索を通じた）包括化を可能にしたとされる（Bingham, 2010; Gooding, 2016; Nicholson, 2013）。本稿はこれが実際に生じたのか、また生じたのであれば、いかに生じたのかを調査する機会を提示するものである。

分析対象は、『タイムズ』引用先の主な主題分野、引用主題分野の時間的傾向、引用先学術文献の種類、最も頻繁に引用している学術誌、最も頻繁に引用している研究機関とした。さらに、引用先出版物の多くに共通する幅広いテーマについても報告し、学術研究者が『タイムズ』を出典として有益と考えた様々な文脈の例も提示する。同情報は、学術出版物における『タイムズ』の引用をインデックスした Web of Science から抽出したものである。

2. 1985年以前の『タイムズ』を引用している主な主題分野

主題分野（Web of Scienceデータベースの定義と分類に準ずるが、掲載されている学術誌に基づく場合が多い）として、『タイムズ』が最も頻繁に引用されているのは歴史（History）であり、引用先学術文献（例：学術誌の記事、単著、編著の章、学術論文など）全体の23.7%を占める（図1）。また、社会科学、人文科学に属する分野の多くでも1985年以前の『タイムズ』が頻繁に引用されていた。

少数の分野における引用が突出してはいるものの、少なくとも1回は引用先となっている Web of Science の主題分野は（全176中）143分野あった。例えば、1回のみ引用先となった分野として、核科学・核技術、生物物理学、水産業、救急医学、菌類学、イメージングサイエンス・写真技術が挙げられる。

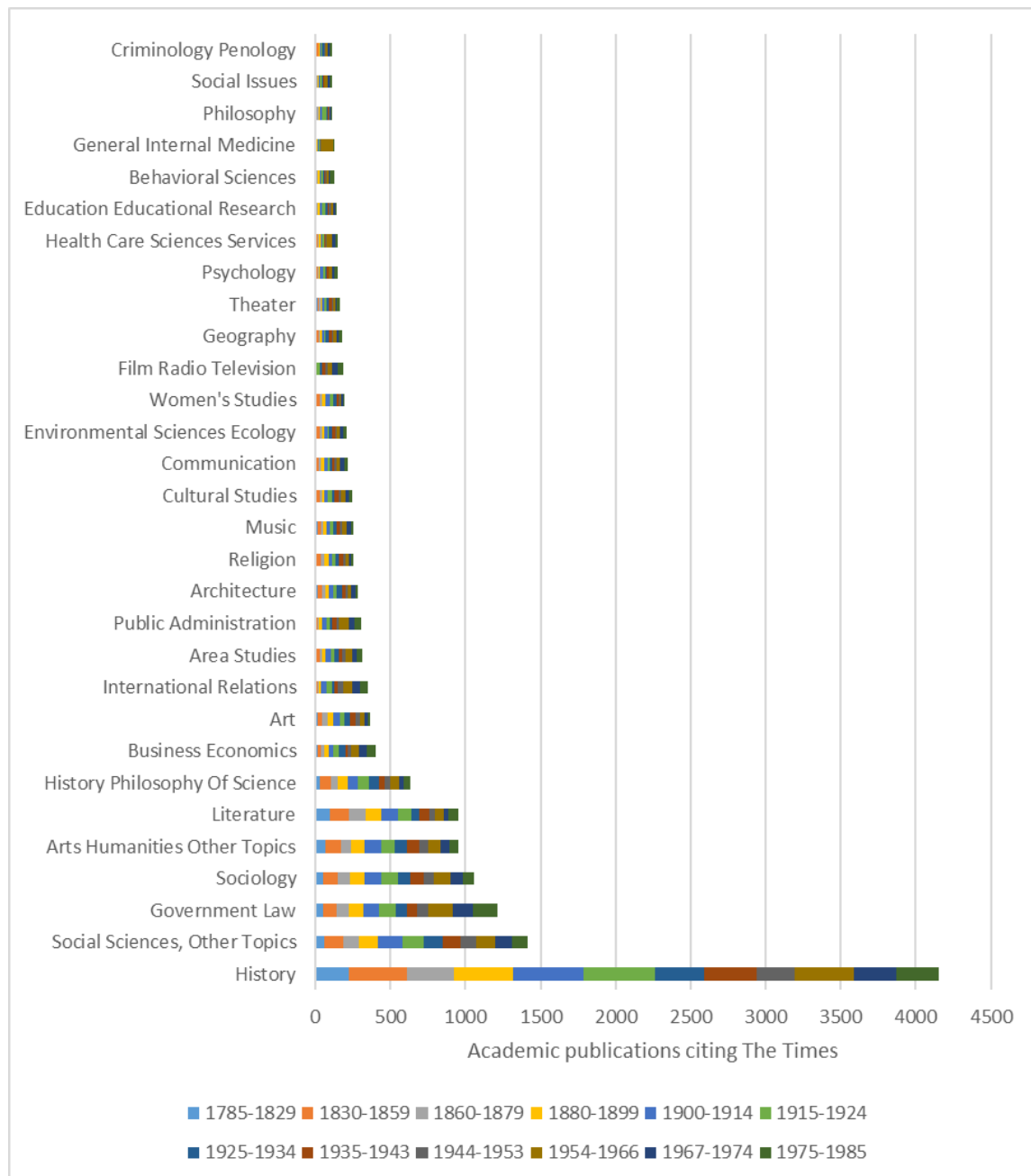


図 1. 1985年以前の『タイムズ』記事を引用した主題分野（2002年以降）トップ30、引用された記事の出版年ごとに内訳

3. 主題分野別の歴史的傾向

研究分野によって、より古い記事を引用する傾向が強かったり、より新しい記事を引用する傾向が強かったりすることが明らかになった（図2）。例えば図2を見ると、歴史（History）の帯は時代が新しくなるにつれ短くなっている。これは、他分野と比較して古い『タイムズ』記事を引用する傾向が強いことを示している。文学、芸術および人文科学についても同様の傾向が見られるが、政府・法（Government Law）、ビジネス・経済（Business Economics）、国際関係（International Relations）では、新しい記事を引用する傾向が強い。恐らくこれは、各分野にとって最も関心の高い時期が反映された結果であろう（ただし、文学については下記を参照）。

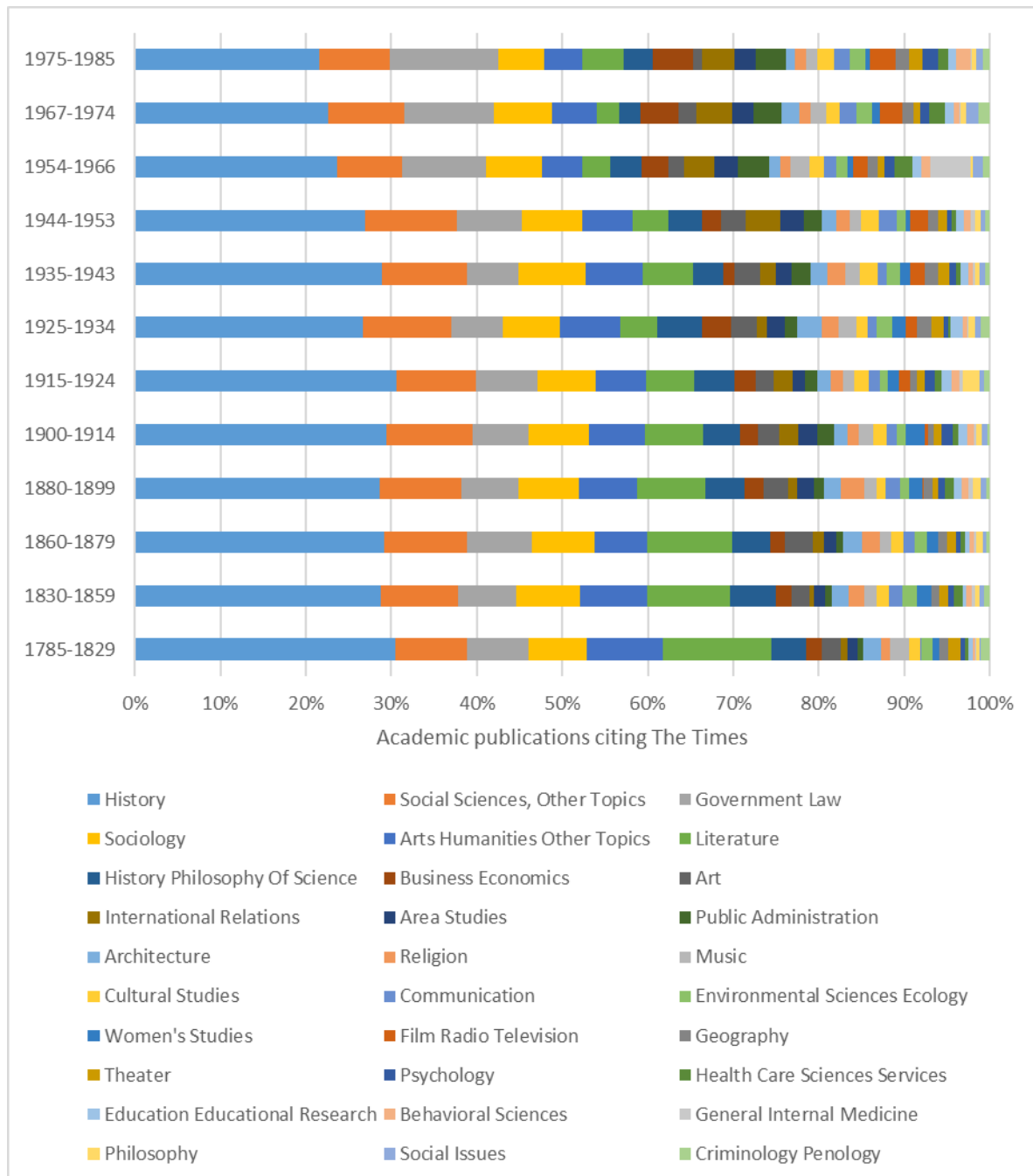


図2. 1985年以前の『タイムズ』記事を引用した主題分野（2002年以降）トップ30、引用記事の出版年ごとに各分野が各期間に引用した割合を表示

3.1 新しい『タイムズ』記事を引用する傾向が強い分野

一部の分野では、新しいニュースを引用する傾向が特に強かった（50%高い）。恐らくこれは、同分野の関心が遠い過去よりも、近い過去と現在との関係に向いているからであろう。引用が最も多かった50研究分野から、一部の例を以下に記す。

- **ビジネス経済学、国際関係、行政学**：どれも現代の問題に焦点を当てているようで、歴史的文献の引用は文脈によるものであった。例えば、英国アルミニウム協会のある分析では同団体やアルミニウムに関する様々な事象について『タイムズ』の記事を10本引用している（例：“Demand for a metal of many uses”, *The Times*, 1960 が “Industry dynamics and trade association power: The shifting nature of business influence in UK aluminium” に引用されている）。
- **社会問題、犯罪刑罰学、都市研究、社会事業**：同上。
- **地理学**：上記トピックと重なり、『タイムズ』を最も引用したのは社会地理学であった。
- **映画・ラジオ・テレビ、コンピューターサイエンス**：各媒体の発明前の文献を引用する必要性が低い分野である。
- **一般内科学**：英国ウィンストン・チャーチル（Winston Churchill）元首相の健康状態を分析した同じ2名の著者による5件など、1954年から1966年の記事を引用した文献が多かった。
- **薬理学・薬学**：20世紀を通して効果的な薬が増えてきたことから、古い記事の引用が少ないのは当然と言えよう。最近の記事の一例として挙げられるのは、1950年から2000年における同じ薬の人間と馬に対する使用の比較研究、“Phenylbutazone (Bute, PBZ, EPZ): one drug across two species” である。
- **人類学**：この分野がより新しい記事を引用する傾向にある理由は定かではない。新しいニュースを引用した一例としては、ダラム州の一人の人類学者の研究に関する1969年のニュース記事 “Virgin birth issue is undecided” を引用した “Durham Anthropology: A provincial history of a provisional discipline” が挙げられる。

3.2 古い『タイムズ』記事を引用する傾向が強い分野

一部の分野では、古いニュースを引用する傾向が強かった（50%高い）。恐らくこれは、歴史的な問題に焦点を合わせているからであろう。引用が最も多かった50研究分野から、一部の例を以下に記す。

- 文学:** 文学において、『タイムズ』は第一次世界大戦前まで特に引用されていた。恐らくこれは、書評が1902年に *Times Literary Supplement* として分離され、1914年からは別に出版されることになったためであろう。
- 女性学:** 多くの文献が『タイムズ』の記事を引用しているのは、婦人参政権運動というかたちで注目を浴びた女性運動の時代からである。英国においては、1906年に女性社会政治同盟（WSPU）が創設され、1918年までには一部の女性に選挙権が与えられ、一人は英国議会の議員に選出されている（シン・フェイン党のコンスタンス・マルキエビッチ Constance Markievicz）。
- 哲学:** 哲学においては、特に1880年から1934年までの『タイムズ』の記事が引用されている。これには、世界大戦に関する議論、哲学者のバートランド・ラッセル（Bertrand Russell）、新技術の影響などが含まれる。例えば、“Time and the Problems of Television: Three Images” では、BBCで初めてテレビ放送された戯曲 “The man with the flower in his mouth” に関する1930年の記事が引用されている。
- 動物学:** 動物学で引用された古い『タイムズ』の記事と言えば、ダーウィンに関する議論や、学術文献にて体系的に報告される以前の種の証拠、移動が種にもたらした影響であろう。例えば、“The importation, release, establishment, spread, and early impact on prey animals of the red fox *Vulpes vulpes* in Victoria and adjoining parts of south-eastern Australia” によると、この種類のキツネは1845年から1879年にかけて9回オーストラリアに輸入されたという。1948年以降の『タイムズ』の広告をもとに、ロンドンではキツネの購入が容易であり、オーストラリアに輸送することができたと主張している。
- アジア研究:** アジア研究で『タイムズ』の引用が特に多いのは第二次世界大戦に至るまでの期間である。恐らくこれは、同地域で記録された大英帝国の様々な面を議論するためであろう。例えば、“Seeing the Elephant: Animal Spectatorship and the Imperial Gaze in Colonial India” では、象の銃猟が禁止された証拠として1875年の記事 “Elephants in Ceylon” が引用されている。
- 物理学:** 物理学において引用されている『タイムズ』の記事は大半が1915年から1924年までのものであり（34本中21本）、それ以降の記事は皆無に等しい（61年間を通して5件）。関心度の高い期間には、相対性理論に関する議論や、同紙に掲載されたアインシュタイン（Albert Einstein）からの書簡が含まれる。

4. 『タイムズ』記事を引用する理由

本章では『タイムズ』が学術研究で引用される理由を分類し、実例とともに解説していく。

『タイムズ』は、ほかでは入手できない事実を裏付ける情報源として、また時には、同紙の見解のため、または世論を反映していることから引用されている。

4.1 新聞の視点、証拠としての利用

メディアやメディアの影響の研究においては、否定的な文脈も含み、直接的証拠の明白な情報源として『タイムズ』を引用することがある（表1）。

表1. 新聞の視点に関する学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
死亡記事	種々	様々な新聞において死亡記事がいかに書かれているかに関する、サンプルによる分析。引用先：The lives we choose to remember: A quantitative analysis of newspaper obituaries
Darwinian dogma challenged. New theory of man's evolution	1956	世界的論争となった化石の発見に対して英紙が懐疑的であった証拠。ダーウィン進化論に対する学術的挑戦という枠組みでとらえられることもある。引用先：‘Darwin was Wrong.’ The International Media Coverage of the Oreopithecus’ Reinterpretation (1956-1959)
Greater Risk of Tropical Disease	1964	「熱い国々」からの移民が「コミュニティ全体」に影響を及ぼしかねないとして危険視する（学術的談話を報告）。Immigration, race and local media: Smethwick and the 1964 general election にて移民に対する恐怖に関する新聞記事として引用。
Nightmare life in the concrete jungle	1972	新聞が「ゲットー」、「スラム」、「コンクリートジャングル」と（シカゴ、米国、英国の）各地を描写した証拠として引用。引用先：Youth, race and the inner-city estate: narratives of everyday life in Manchester's Hulme, 1970–1994
Manor to be Hospital for ‘Fringe Medicine’	1974	『タイムズ』に基づくケーススタディ論文にて、代替医療に対する新聞の姿勢の証拠として引用。引用先：Everyday Healthcare Regulation: British Newspapers and Complementary and Alternative Medicine

4.2 法的、社会的変化

社会的変化の分析においては、歴史的事象を裏付ける残り少ない情報源の一つとして新聞報道を利用することがある（表2）。また、一過性の情報源であるとともに、まとまりのあるデジタル情報源としても有益であることは、同様の情報を提供する政府や企業の一回性の記録とは対照的である。以下に記す最初の例では、新聞広告がいかにして宣伝されている製品やサービスに関する黙示的情報源になり得るかを表している。さらに、歴史的社説も、個人の見解ではあるが、世間の関心を集めた話題の証拠として利用されてきた。

表2 法的、社会的変化に関する学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
Laundress advert	1817	洗濯女が顧客獲得のために提供したサービスの証拠として。引用先：Georgian Washerwomen: tales of the tub from the long eighteenth century
Poor law for Ireland	1847	ジャガイモ飢饉の後にアイルランド支持を表明したグラスゴーからの陳情の証拠として。引用先：‘Irish fever’ in Britain during the Great Famine: immigration, disease and the legacy of ‘Black ‘47’
British Engineers at Constantinople	1873	イスタンブールに英国人エンジニアが多数存在していたことの証拠として。引用先：British Workers and Ottoman Modernity in Nineteenth-Century Istanbul
The Enemy Alien. Internment of Suspects	1914	第一次世界大戦中の1914年に起きたスパイ騒動の証拠として。引用先：Fictional German governesses in Edwardian popular culture: English responses to German militarism and modernity
Women patrols	1914	女性の「気まぐれな振る舞い」から関係者全員を守るべく軍事基地付近をパトロールする女性たちの出現。引用先：‘Giddy Girls’, ‘Scandalous Statements’ and a ‘Burst Bubble’: the war babies panic of 1914-1915
Peace day in London	1919	第一次世界大戦の復員軍人が祝福された様子の証拠として。引用先：‘And those who live, how shall I tell their fame?’ Historical pageants, collective remembrance and the First World War, 1919-39
Mayflower pageant	1920	英国が英米関係を祝福した証拠。引用先：The Mayflower and ‘Mother Plymouth’: Anglo-America, Civic Culture and the Urban Past
The problem of the domestic servant	1937	家事使用人探しが難しくなってきたことに関する『タイムズ』記事。労働形態における社会的変化が進み、（あらゆる階層で）外食する人が増えたことを示す証拠として引用。引用先：Dining Out: Restaurants and British Society in the 1930s
Heart-to-heart over cups of tea	1968	ストライキ中の女性たちが女性閣僚と男女平等について議論したとの報道を、ストライキにおける一般組合員の主体性を示す証拠として。引用先：The Women’s Movement and ‘Class Struggle’: gender, class formation and political identity in women’s strikes, 1968–78
End of birching near	1970	体刑に対する姿勢の変化を示す証拠として。引用先：Human Rights at the Edges of Late Imperial Britain: The Tyrer Case and Judicial Corporal Punishment from the Isle of Man to Montserrat, 1972–1990.

4.3 医学的または健康に関する発見や脅威

健康に関する話題は新聞で頻繁に報じられる（例：Kousha & Thelwall, 2019）ことから、健康関連の変化と医学的革新に関する公共情報、これに対する姿勢は新聞にて豊富に提供されており、引用することができる（表3）。

表3. 健康に関する学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
No penicillin for the public	1942	ペニシリン供給関連の政策に関する証拠として。引用先：The role of the media in influencing public attitudes to penicillin during World War II
Letter, 'Health Policy: Claims of Social Medicine'	1942	著名投書者の姿勢を示す証拠として。引用先：The 'new era in medicine': John Ryle and the promotion of social medicine
Influenza and Its Causes	1918	『タイムズ』がパンデミックの最中にインフルエンザといった一般的疾患に関する研究の必要性を強調していること。引用先：Putting pandemics in perspective: England and the flu, 1889–1919
The Metropolitan Railway	1868	電車内でタバコの煙を避ける難しさについての社会的関心（投書）の証拠として。引用先：Minding the Gap: Uncovering the Underground's Role in the Formation of Modern London, 1855-1945
Advance in Study of Common Cold: Viruses Propagated in Tissue Culture	1960	ジャーナリストが組織培養技術の開発について何の問題もなく、重要な進歩と捉えていたことを示す証拠として。引用先：A Troubled Past? Reassessing Ethics in the History of Tissue Culture

4.4 新聞や一般大衆の姿勢

新聞は、一般大衆ではなく自紙の姿勢を報じるものだが、研究者は特定の問題に対する世論に関連していると判断する場合もある。また、読者からの投書も、部分的とは言え、世論の直接的証拠として引用されることがある（表4）。

表4. 一般大衆の姿勢に関する学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
British and French at Salonika	1915	陸軍のラバに対する姿勢の証拠として。引用先：The vagaries and value of the army transport mule in the British army during the First World War.
Free Bigamy for Heroes	1918	法的刑罰を逃れた重婚者の負傷兵に苦言を呈した投書。裁判所の重婚者に対する扱いに一貫性がないことを示す証拠として引用。引用先：Trust, authenticity and bigamy in twentieth-century England.

4.5 政府または体制の姿勢や方針

『タイムズ』は政府の公式声明を報じることが多々あり、政治家や、国教会の主教など権力者による声明を報じてきたことから、これらを探し出し、引用する上で重宝する（表5）。ただし、『タイムズ』においてこの種のコンテンツは、ここ数十年間、少なくなってきたと言えるかもしれない。

表5 政府に関する学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
The Triumph of Sea Power	1918	海軍力の重要性に関する英国体制の主張の証拠として引用された海軍大臣の声明。引用先： Rebuilding the Mills of Sea Power: Interwar British Planning for Economic Warfare against Japan
The national Church	1919	教会改革に関する重要な視点の証拠として引用された、同テーマに関する説教。引用先： Herbert Hensley Henson, J. N. Figgis and the Archbishops' Committee on Church and State, 1913–1916: Two Competing Visions of the Church of England
Salvage From The Dustbin	1940	リサイクルに関する戦時中の会議についての報告。引用先： Paper salvage in Britain during the Second World War

4.6 芸術に関する見解

『タイムズ』は、特に *Times Literary Supplement* が分離独立するまで、芸術に関する批評分析の情報源であった。また、作品に対する反応についても、受賞や来場者数といった間接的証拠を載せている。これらの情報は、芸術作品に関する歴史的議論や新たな評価において引用が可能である（表6）。

表6. 芸術および人文科学に関する学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
The Empire writes back with a vengeance (by Salman Rushdie)	1982	ポスト大英帝国の英作家が小説を一新させると主張。Greek Migrant Literature in the Early Roman Empire に動機づけとして引用。
The Audience at “Parsifal”	1914	『パルジファル』は宗教的であるとした評論家の主張の証拠として。引用先： Spiritual Succor or Sacrilege? British Catholic Responses to and Interpretations of Wagner’s Parsifal
Femina-Vie Heureuse Prize	1922	1920年から1939年まで続いた女性審査員による英国文学賞や受賞者発表に関する記事が Narrative data, informational poetics: Modernist literature and the emergence of cybernetic thought にて引用されている。
Panorama Of Boothia	1834	北極圏に関する一般的な描写の証拠として。引用先： Going in Circles: Changing Perceptions of the Arctic Through Literary and Visual Representations in the Long-Nineteenth-Century
Hotch-potch Musical Version of Oliver Twist	1960	書籍のミュージカル版に対する批評。引用先： From Books to Broadway: The Musicalization of Literature

4.7 世界情勢の証拠

『タイムズ』は、世界に関する事実や、特に発行当時、英国に関係していた事象に関する事実の膨大な宝庫である。大英帝国の時代には、世界中のほぼ全域が含まれていたと言えるが、その後も広範に及ぶ国際報道が続いた(表7-11)。例えば、『タイムズ』を引用している28文献において世界各地で生じた大虐殺が論じられているが、同事象を主として記録してきたのは新聞だと言えよう。本項では、一部複数の地域に渡るものもあるが、地域ごとに分類して例を示す。引用先の主題は、国際政治に限られず、多くのテーマが幅広く網羅されている。

表 7. アフリカ関連の様々なトピックについて学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
Mr. Rhodes and South Africa	1897	ローデシア/ジンバブエを大英帝国に加えた件について演説者を支持する「大群衆」の証拠として。引用先：‘Sixteen tons’: mineworkers and their communities in Clifton-Morenci, Arizona and Kimberley, South Africa, 1880-1910
The Natal Zulus at Olympia	1899	ズールー族芸術家がロンドンで不当な扱いを受けていた証拠として。引用先：The 1907 Deputation of Basuto Chiefs to London and the Development of British-South African Networks.
Dying children wait for help	1968	ビアフラにおける食糧不足の直接的証拠として。引用先：‘The Other Side’ of the Nigeria- Biafra War: A Transnational History
Rhodesian Police accused of Torture	1975	戦闘地域における一般人の体験に関するインタビュー。引用先：Zimbabwe’s Liberation War and the Everyday in Honde Valley, 1975 to 1979
The Economic Tragedy of Egypt	1977	1977年、エジプトにおける夜間外出禁止令の証拠として。引用先：The Moral Economy of Global Crowds: Egypt 1977, Brazil 2013
Trade with Egypt	1930	エジプトへの貿易使節団。引用先：It’s no secret at all: Extra economic and exogenous development and change in the interwar Egyptian economy, 1919-1939
Racial Equality	1950	南西アフリカにおけるヘレロ族他ナミビアの人々の状況に関する情報。引用先：Remov[e] Us from the Bondage of South Africa: Transnational Resistance Strategies and Subnational Concessions in Namibia’s Police Zone, 1919-1962

表 8. 南北アメリカ大陸関連の様々なトピックについて学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
Development in Brazil	1973	国際社会が森林破壊から目をそらし、開発を称賛した証拠として。引用先：The materiality of data transparency and the (re)configuration of environmental activism in the Brazilian Amazon
Democracy in Chile	1952	チリが南米の「自由のオアシス」だとする『タイムズ』の主張。引用先：Western Europe and Chilean development 1945-1973.
The Other Spains. Spanish America and the War	1937	ラテンアメリカにおけるスペイン内戦による影響の証拠として。引用先：Mexico and the Spanish Republic. 1931-1939.
The Gold Diggings on the Fraser River	1858	「男らしい」白人金採掘者の美化。引用先：White Power, Yellow Gold: Colonialism and Identity in the California and British Columbia Gold Rushes, 1848-1871
Obituary. Professor Gayley. English Scholar and Humanist	1932	米国人文学教授の略伝。引用先：Plautus goes USA: the adaptation of <i>Rudens</i> by the Ladies’ Literary Society of Washington University in St. Louis, Missouri, in 1884

表 9. アジア関連の様々なトピックについて学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
Indian Criminal Procedure	1883	英国による植民地支配前のインドにおける法制度とこれに対する批評。植民地時代の姿勢の証拠として報告。引用先：Trust Law Goes East: The Transplantation of Trust Law in India and Beyond
To the Earl of Moira	1813	インドにおけるある英国外交官の行動に対する懸念。引用先：A Nabob's Progress: Rowlandson and Combe's The Grand Master, a Tale of British Imperial Excess
Contemporary Chinese painting	1933	ロンドンにおける齊白石 (Qi Baishi) の「魅力的な絵画」に対する批評家の称賛。引用先：Introducing the art of modern China: Trends in exhibiting modern Chinese painting in Britain, c. 1930-1980
Ur of the Waters: Fortification by Canal	1930	『タイムズ』の考古学関連記事から引用された、古代都市ウルの所在地に関する記述。引用先：The Suburbs of the Early Mesopotamian City of Ur (Tell al-Muqayyar, Iraq)
America in the Philippines, Part VII	1910	フィリピンのバギオに米国が建設したヒル・ステーションに対する英国批評家の称賛。引用先：The Iron Hand of Power: US Architectural Imperialism in the Philippines
New tactics in Malaya	1951	マラヤ連隊に関する統計。引用先：Securitization of undocumented migrants and the politics of insecurity in Malaysia
Prisoners And Captives: Orang-utans from Sumatra	1928	インドネシアから欧州へのオランウータン輸入に対する抗議の証拠として。引用先：Plantations, Peddlers, and Nature Protection: The Transnational Origins of Indonesia's Orangutan Crisis, 1910-1930
The Opening of The Karun River to Commerce	1889	イランにおける英国運営の汽船の拡大。引用先：British consuls and "local" imperialism in Iran, 1889-1921
The arrival of the British China Squadron at Kobe	1905	西洋が認識した日本の目覚ましい工業化の証拠として。引用先：Reverse emulation and the cult of Japanese efficiency in Edwardian Britain

表 10. オーストララシア関連の様々なトピックについて学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
The king of the Maori	1884	タウィアオ (Tawhiao) 王のロンドン訪問に関する好意的な報道の証拠として。引用先：Kingitanga and Crown: New Zealand's Maori King movement and its relationship with the British monarchy
Patent reports	1908	英国における石綿セメントボードの特許取得。引用先：The effect of global trade on the New Zealand house
A gun for every city	1918	オーストラリアにおける戦利品展示に対する政治家の熱意の証拠として。引用先：War remains: contributions of the Imperial War Graves Commission and the Australian War Records Section to material and national cultures of conflict and commemoration
The future of telegraphy	1926	英国有力政治家の通信政策に関する見解を引用。引用先：'Upholding the Penny Principle': The Australian Press, Empire Communications and the 1929 Beam Wireless Select Committee
Losses in the Pacific: The cost of new ships	1936	1930年代、英国の太平洋における海運への助成金。引用先：'Fiji is really the Honolulu of the Dominion': Tourism, empire, and New Zealand's Pacific, ca. 1900-35

表 11. 欧州関連の様々なトピックについて学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
Ukrainian Minority in Poland	1931	ポーランドにおけるウクライナ人の状況に関して婦人国際平和自由連盟が公表した報告に対する国際的関心の証拠として。引用先：Minority Rights and Humanitarianism: The International Campaign for the Ukrainians in Poland, 1930-1931
Feeding the Enemy: Austrian needs	1919	第一次世界大戦後、オーストリアの飢えに苦しむ人々に食料を届けようとする米国の試み。引用先：The Austrian hunger crisis and the genesis of international organization after the First World War
Editorial comment about tram tracks	1870	路面電車の線路が都市における既存の輸送手段を脅かすという懸念。引用先：The Machine in the City: Public Appropriation of the Tramway in Britain and Germany, 1870-1915
Universal time	1886	英国において地方時ではなく鉄道時間が使われるようになったとの報告。引用先：One Clock Fits All? Time and Imagined Communities in Nineteenth-Century Germany.
The Church in Spain, Report on Conditions by British Clergy	1936	スペインにおけるキリスト教の状況を報告した出版。引用先：Sacred Destruction? Anticlericalism, Iconoclasm and the Sacralization of Politics in Twentieth-Century Spain

4.8 その他

本項では、上記の主分類に該当しない、さまざまな理由で『タイムズ』を引用した例を記す（表 12）。

表 12. 様々なトピックについて学術研究で引用された『タイムズ』記事の例

『タイムズ』記事	年	学術的引用の文脈
Time, space, and gravitation	1919	物理学の理論に関するアインシュタインの考察。引用先：Defining a crisis: the roles of principles in the search for a theory of quantum gravity
Women Doctors for the Wounded	1915	女性軍医の国際的活用に関する報道が女性軍医の国際的普及の証拠として引用されている。引用先：Caroline Matthews's <i>Experiences of a Woman Doctor in Serbia</i> : Advocacy for Women Doctors in Early Twentieth Century War Writing
At a Meeting of the Members of the Jockey Club	1836	特定クラブへの高額な入会金が、その社会的排他性の証拠として引用されている。引用先：The Demimonde as a Female Dandy: Masks, Masquerade, and the Making of the Dandy's Personae in Nineteenth-Century British Culture

5. 引用頻度の高い学術誌

先の諸表では、『タイムズ』が幅広いジャンルの学術文献において有益とされる理由をみてきたが、引用記事が掲載された学術誌の誌名を分析すれば、『タイムズ』を最も有益と考える分野についてさらなる洞察が得られるであろう。また本章では、引用頻度が高いWeb of Scienceの主題分野についての前章の洞察をさらに深めていく。

『タイムズ』を最も頻繁に引用している学術誌名としては、「歴史」を意味する言葉が使われていたり（例：*English Historical Review*）、歴史上の時代に言及していたり（例：*Journal of Victorian Culture*, *The Dickensian*）（表13）、明示的にはないが歴史に関連するもの（例：*Journal of Medical Biography*）が大部分を占める。

また、あるトピックについて現代と過去の両面から取り上げる“studies”系学術誌も多い。例えばトップ30からでは、*Journal of British Studies*（「中世から現在までにいたる英国文化」, <https://www.cambridge.org/core/journals/journal-of-british-studies/information/about-this-journal>）、*Britain and the World*（「過去から現在にいたる英国とその交流」, <https://www.britainandtheworld.org>）、*Modern Asian Studies*（「現代アジアの歴史、社会人類学、社会学、政治学、そして文化」, <https://www.cambridge.org/core/journals/modern-asian-studies>）などが挙げられる。この区分には *Burlington Magazine*（「諸芸術とその歴史」, www.burlington.org.uk）、*The London Journal*（「過去から現在にいたるまでの大都市社会のあらゆる側面」, www.thelondonjournal.org）も含まれる。

表 13. 『タイムズ』記事を引用した学術文献を掲載した学術誌トップ30

学術誌名	引用文献数
Twentieth Century British History	87
Parliamentary History	70
Women's History Review	70
Journal of British Studies	67
Historical Research	53
Journal of Victorian Culture	53
International History Review	52
Cultural & Social History	50
English Historical Review	49
The Historical Journal	45
History Workshop Journal	41
Social History of Medicine	41
Historical Journal of Film, Radio and Television	39
British Journal for the History of Science	35
Labour History Review	34
Journal of Contemporary History	33
The London Journal	33
Journal of Medical Biography	29
History	28
Burlington Magazine	27
Journal of Historical Geography	27
Journal of the History of Collections	27
Victorian Literature and Culture	27
History of Education	26
The Dickensian	25
Sport in History	25
Britain and the World	23
Modern Asian Studies	22
Notes and Queries	22
War in History	22

上記のほか、『タイムズ』を少なくとも1度は引用した学術誌の「ロングテール」は1,284誌におよぶ。例えば、*Theory in Biosciences*、*South Asian Popular Culture*、*Malaria Journal*、*Ultrasonics Sonochemistry* などである。

6. 引用先文献によく見られるテーマ

『タイムズ』を引用している学術文献の特徴としては、先に示した詳細な例からも察せられるように、パターンがあると言うよりは、多様であると言えよう。それでも、引用先文献のタイトルに頻出する用語が示すように、英国、歴史、戦争は関連性が高く、女性、文化、ヴィクトリア朝、アイルランド、インド、大英帝国についても同様である。

『タイムズ』を引用している文献のタイトルをトピックモデリングによる自動分析にかけることで、少なくとも理論上は、隠れた要因を見だし、さらなる洞察を得られる可能性がある。最適なトピックモデルには、5つの幅広いトピックあるいはテーマがある。

- **トピック 1** : 英国法
- **トピック 2** : 帝国と戦争
- **トピック 3** : 政治と社会的変化
- **トピック 4** : 第一次世界大戦
- **トピック 5** : 第一次世界大戦における女性と社会問題

7. 引用頻度の高い機関

先に『タイムズ』を引用した地域別の文献を報告したが、これとあわせて、引用頻度の高い機関を特定することにより、さらなる洞察を得られよう。リストを報告するほどの価値はないが、一般的なパターンは参考になり得る。『タイムズ』を最も引用した機関の大部分は、英国とその旧植民地に加え、準英語圏や英語圏に所在する。米国、オーストラリア、カナダ、南アフリカ、ニュージーランド、アイルランド、香港、イスラエル／パレスチナ、シンガポールである。これは植民地支配の関係によって説明がつくであろう。例えば、研究者が家族とのつながりがあり、言葉の通じる国に移住したり、旧植民地の国々が歴史の一部として英国に関心を抱いたりといった背景である。

また、ドイツ、フランス、フィンランド、ベルギー、スペイン、デンマーク、オランダ、スイスなど、欧州の大学の一部も『タイムズ』を頻繁に引用している。この背景には、英国が1973年に欧州共同体（現在の欧州連合）に加わり、加盟国との経済的、文化的結びつきが増大したことがあるだろう。例えば、ライデン大学は1970年代のオランダにおいて英国が出資した土地開発の総計を裏付ける証拠として『タイムズ』の記事を引用した。また、学術分野として欧州が平行して出現したことも背景にあらう。一例を挙げると、ライデン大学による別の文献、“Disabled citizens and the neoliberal turn in Britain: Whose rights and whose responsibilities?” は、英国に焦点を当てており、著者は欧州史の研究者であった。

上述以外の地域で、『タイムズ』の引用頻度が高かった機関は以下のとおりである。

- **ロシア、ロシア科学アカデミー**: 例えば、親露家の小説家、ジャーハーディ (William Gerhardie) のスペルの変化、そしてグレーム・グリーン (Graham Greene) による彼に対する高評価の証拠として『タイムズ』の記事が2本用いられている。引用先: William Gerhardie: An English Writer with a Russian Accent on the Revolution and Civil War.
- **中国、復旦大学**: 1939年の『タイムズ』記事“An Oxford Tribute to Chiang Kai-Shek: Profound Admiration” が陳体強 (Chen Tiqiang) の英国教育の証拠として使用されている。引用先: Tracing Chinese Scholar Chen Tiqiang’s Pursuit of International Law Education and His Major Contribution to the Doctrine of Recognition

- **日本、京都大学**: アルダブラ環礁における空港建設に対して、環境保全の観点から科学的な反対意見が出ている証拠として、アルダブラ環礁に関する1970年の様々な記事が用いられている。引用先: Towards ‘a new Okinawa’ in the Indian Ocean: Diego Garcia and Anglo-American relations in the 1960s
- **トルコ、サカリヤ大学**: 1951年の記事 “Security council vacancy: Seven more inconclusive ballots” がラテンアメリカの外交政策に米国が影響を及ぼしている証拠として用いられている。引用先: Controlling International Institutions: How the US Engineered UNSC Non-permanent Members in the Early Cold War

ほかにも、幅広い種類の機関が『タイムズ』を引用してきた。引用頻度が最も高かったのは、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学、ハーバード大学、エディンバラ大学、グラスゴー大学、カーディフ大学、モナッシュ大学、メルボルン大学、香港大学、ゲルフ大学、トロント大学など、研究に力を入れている大規模な大学である一方、英国のウルヴァーハンプトン大学、マンチェスター・メトロポリタン大学、リンカーン大学、米国のアパラチアン州立大学など、教育と研究の双方に力を入れている大学も見られた。さらに、ヴィクトリア・アルバート博物館（ロンドン）、科学博物館（ロンドン）、メルボルン・ゲノミクス・ヘルス・アライアンス（オーストラリア）など、より小規模な一部専門機関も『タイムズ』を引用している。

8. 引用先文献の種類と年

少なくとも Web of Science においては、『タイムズ』を引用している文献の3分の2が機関誌の記事 (Article) であり、編著の章 (Book Chapter) が17%、単著 (Book) が6%、学位論文 (Dissertation/Thesis) が2%であった。しかしこれは、Web of Science のセレクションとインデックス方法に依存するところが大きく、単著、編著の章、学術論文の貢献度が著しく過小評価されていると言えよう (図4)。

次のグラフを見ると、『タイムズ』の引用が2021年以降、急激に落ち込んでいるようだが、誤解のないように指摘しておく、これは、*Al Jazeera*、*China Daily*、*The Guardian*、*The New York Times*、*The Times of India*、*The Washington Post* など、ほかの新聞や報道機関についても近年の引用が減少しており、同様のパターンが確認できることから、ほぼ確実に Web of Science におけるインデックス方法の変更に起因するものであろう。

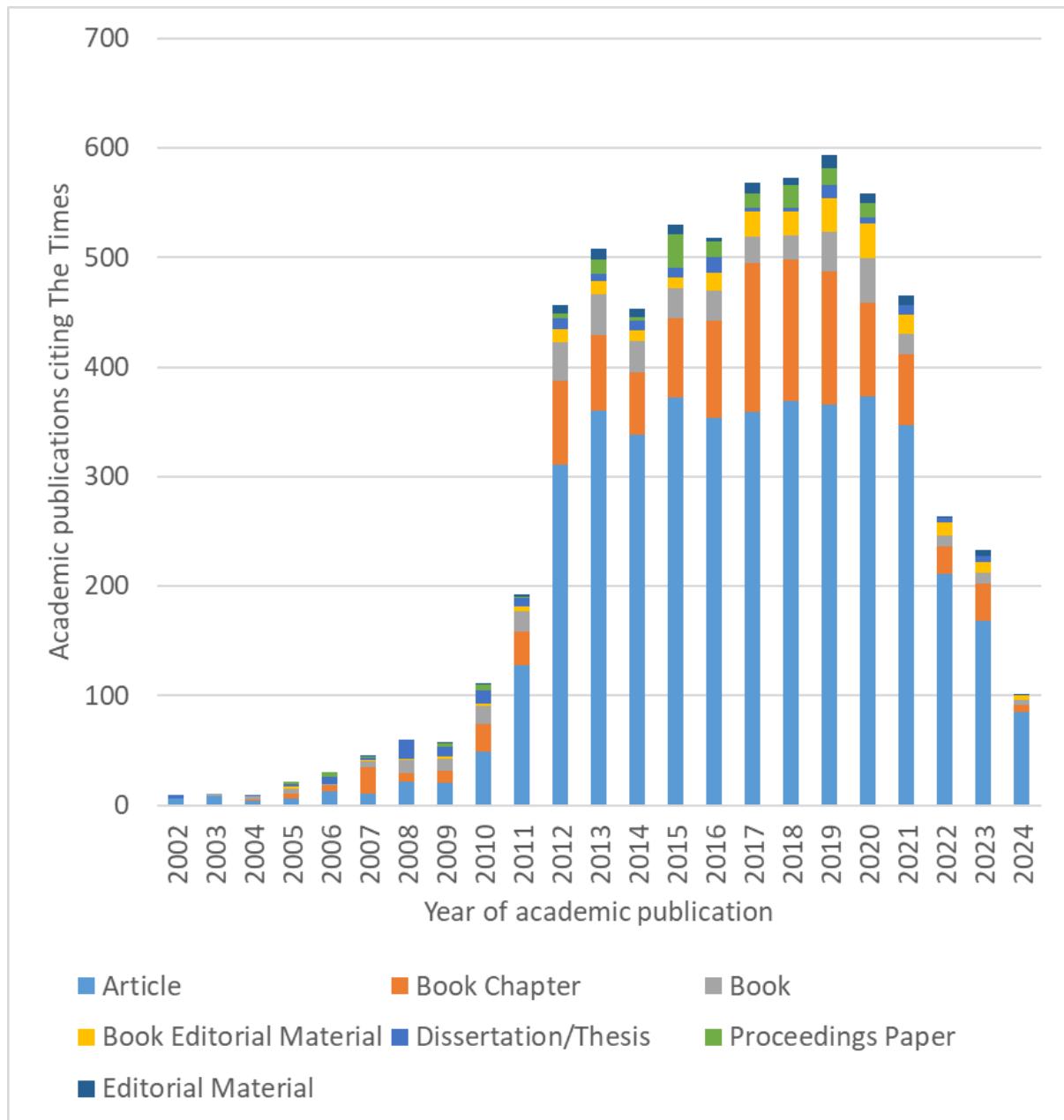


図 4. 1985年以前の『タイムズ』記事を引用した文献の種類トップ7、引用先文献の出版年ごとに内訳

9. まとめ

本稿では、『タイムズ』を引用している査読済み学術文献におけるテーマをいくつか特定した。これらのテーマ、そして引用先文献に歴史的テーマのものが多い点にもかかわらず、『タイムズ』が有益となり得るトピック、地域、目的が広範囲におよぶことは明白である。言うまでもなく、『タイムズ』アーカイブのユーザーは学部生や大学院生を主としているものの、それらによる小論や学位論文は体系的にインデックスされていないことから本稿の対象外となっている。『タイムズ』を引用している学術研究については、主なトピックが以下のとおり特定された。

- 新聞の視点
- 法的、社会的変化
- 医学的または健康に関する発見や脅威
- 新聞や一般大衆の姿勢
- 政府または支配層の姿勢や方針
- 芸術についての見解
- 世界情勢の証拠：旧大英帝国が目立つものの、アフリカ、アジア、南北アメリカ大陸、オーストララシア、欧州についても。

『タイムズ』を最も活用しているのは、主に歴史的側面を伴う分野であるが、アジア研究など、第一の焦点が歴史ではない分野も多々含まれる。また、明らかに歴史に焦点を合わせていない数多くの分野でも、焦点の一面として歴史的起源に触れるというかたちで『タイムズ』が引用されることもある。

10. 参考資料

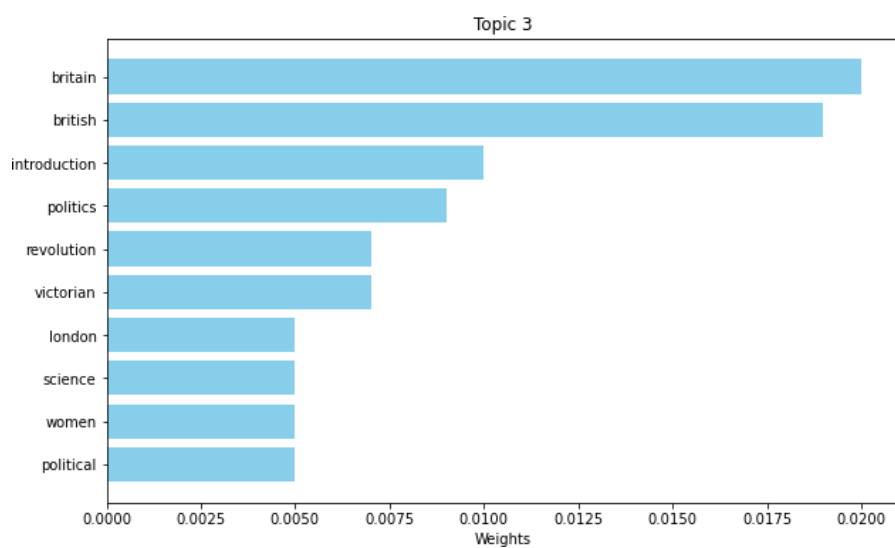
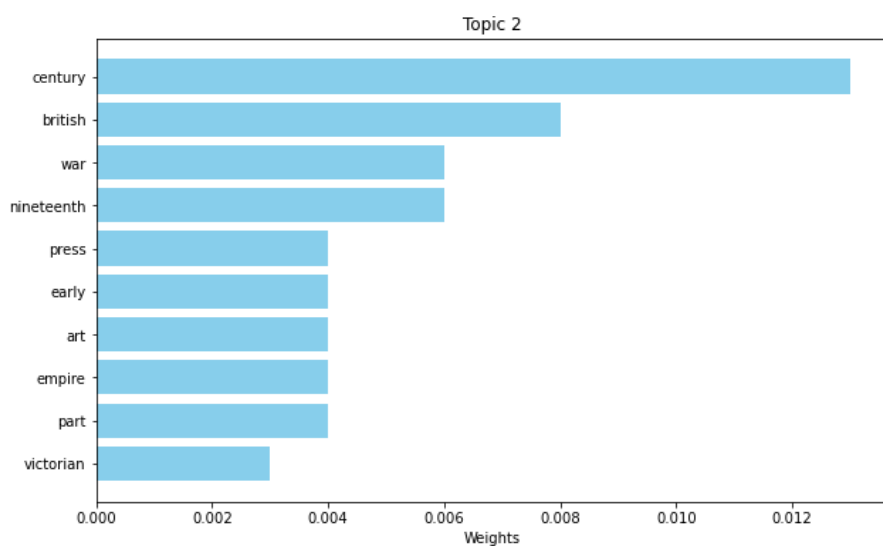
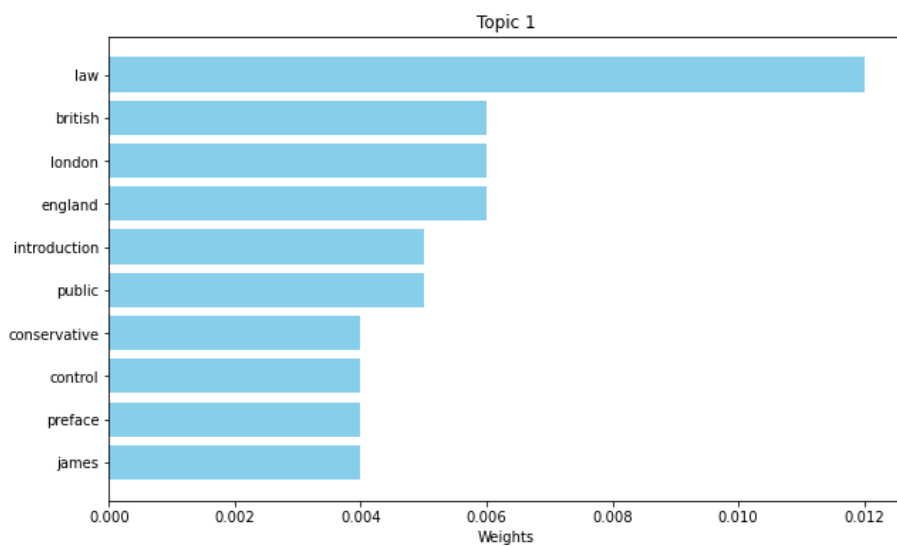
Bingham, A. (2010). The digitization of newspaper archives: Opportunities and challenges for historians. *Twentieth Century British History*, 21(2), 225-231.

Gooding, P. (2016). *Historic Newspapers in the Digital Age: Search All About It!* Routledge.

Kousha, K., & Thelwall, M. (2019). An automatic method to identify citations to journals in news stories: A case study of UK newspapers citing Web of Science journals. *Journal of Data and Information Science*, 4(3), 73-95.

Nicholson, B. (2013). The Digital Turn: Exploring the methodological possibilities of digital newspaper archives. *Media History*, 19(1), 59-73.

11. 付録:トピックモデリングのトピックキーワード



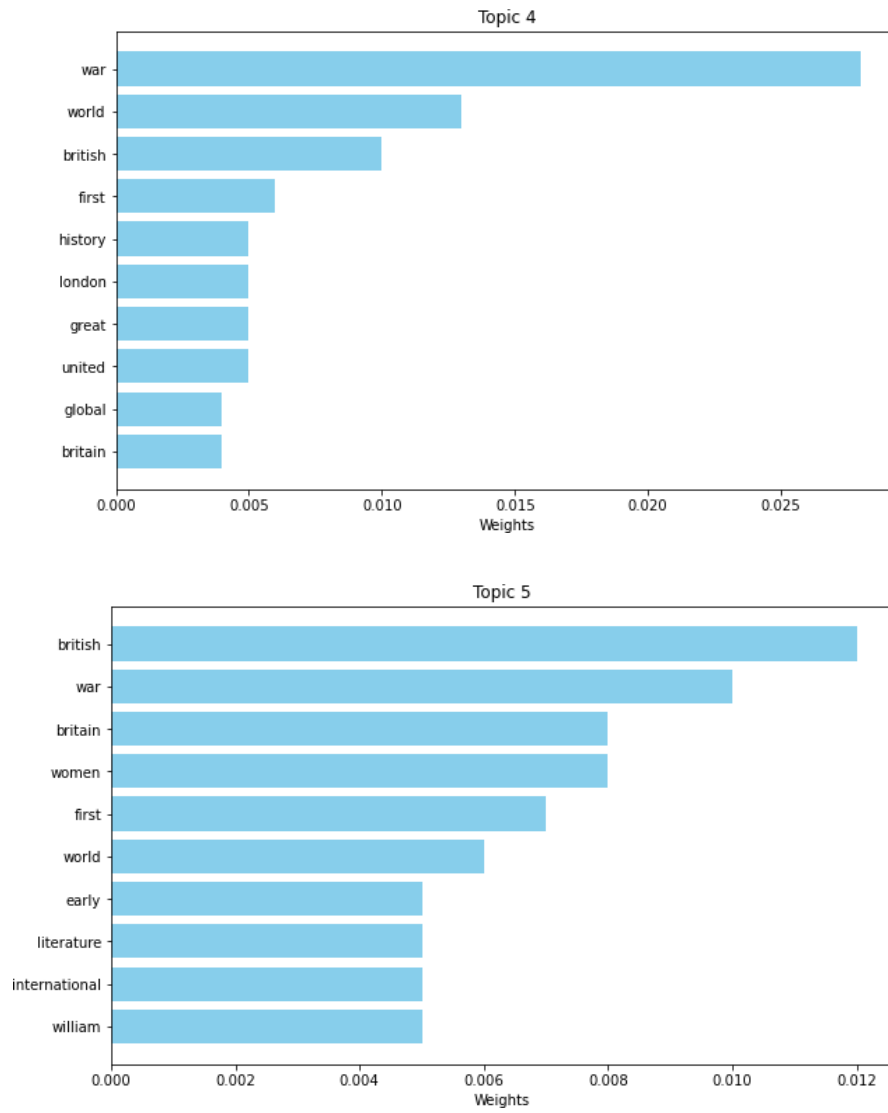


図5:トピックモデリング分析によって特定された5つのトピックに関連する上位キーワード

『タイムズ』デジタル・アーカイブ、および本資料に関するお問い合わせは下記まで：



センゲージラーニング株式会社 Gale事業部

〒101-0073 東京都千代田区九段北1-11-11 第2フナトビル 5F

電話 03 (3511) 4390 GaleJapan@cengage.com www.gale.com/jp